

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：33929
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520595
 研究課題名（和文） 国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話が
 できる日本人の育成
 研究課題名（英文） Pragmatic index of EIL and its application to English Teaching:
 Developing English conversation competence of Japanese learners
 研究代表者
 津田 早苗（TSUDA SANAE）
 東海学園大学・人文学部・教授
 研究者番号：80082361

研究成果の概要（和文）：

英語能力が高くても日本人が会話に参加できないのは、ターンと発話量、あいづち、自己開示、話題の展開スタイル、質問と答え、他者修復などの語用的側面が英語母語話者と異なるからであるという仮説を検証した。英語母語話者の初対面会話を英・米・豪で収録し、日本で収録した日本語の会話とこれらの項目について分析・比較した。その結果、日本語母語話者の自己開示の内容・深度の差、話題の展開スタイル、あいづち、質問、他者修復の用法の違いが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

Japanese speakers with high English proficiency test scores do not always prove to be effective communicators in English. The purpose of this research is to verify a claim that the Japanese native speakers' pragmatic transfer can negatively affect intercultural conversations in English. We first analyzed conversational data collected in Britain, the U.S.A and Australia to see if there is a common conversational style in the Inner Circle English speakers and concluded there is not much difference among them. By comparing the results with the Japanese conversational data collected in Japan, we found the differences between the speakers of the two languages in back channels, self-disclosure, question-answer sequences and topic development styles.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、異文化コミュニケーション、語用指標

1. 研究開始当初の背景

（1）文部科学省の「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想」では日本人は英語

力が十分でないため外国人との交流が制限されたり、国際的に適切な評価が得られないことが指摘されている（文部科学省、2002）。

(2) 英語の文法、語彙、発音などを十分に習得した日本人でも英語での反論、会話で発言権を得、主張を述べることに困難を感じていると報告されている(寺内・小池・高田他、2008)。

2. 研究の目的

英語能力が高い日本人であっても会話に参加できないのは、英語文化を反映する話者交代・話題の展開・自己開示などの語用論的相違が原因であるという仮説を検証し、英語教育への提言を行う。

3. 研究の方法

(1) 英語話者の語用論的特徴が母語話者の英語変種により異なるかを検証するために英・米・豪の会話データを現地で収集した。変数を制限するため大学卒男性3名による30分の初対面会話を各10会話以上収録・書記化し、語用特徴を分析した。

(2) 英語話者と同じ条件の日本語会話を同数以上収録、書記化、語用特徴を分析・比較した。

(3) 英語と日本語会話の分析結果を検証するため、英語話者と日本語話者による英語会話を同数以上収録、書記化、語用特徴を分析・比較した。

4. 研究成果

日・英語会話の語用指標を明らかにするために、研究代表・分担者は収録した会話データを用い、下記の項目について英語の3変種間の比較、日本語の分析、研究対象によっては異文化会話を比較し、次のような結果を得た。

(1) ターンと発話量

三英語圏の3人初対面男性初対面会話では発話量、ターン数、そして3者間のそれらの配分において、地域間で有意な差は認められなかった。すなわちこれらの英語圏の初対面会話においては同じようなリズムで会話が進むことが分かった。また3者間での発話量やターンの配分も類似傾向がみられた。このことはこれらの地域では発話量とターンに関する規範があり、従って発話量やターン数は語用指標となる可能性が示唆された。また同条件の日本語会話においても3者間での配分は英語圏と同じような結果を得た。これは、今まで指摘されてきた日本語会話の話者間配分の不均衡とは異なるもので、今後さらなる分析と考察が必要である。さらにターンの種類を分析したところ、英語会話では「奪い取り」が日本語会話よりも多く出現していることが明らかとなった。このことが日本語母語話者

が英語会話でうまくターンをとれない一つの理由となっていると考えられる。

(2) あいづち

イギリス英語会話、アメリカ英語会話、オーストラリア英語会話、日本語会話におけるあいづちの使用状況を調査した。3種の英語会話では語彙的あいづちが多く用いられ、日本語会話では非語彙的あいづちが多く用いられていた。生起環境については、英語会話では文末に打たれるのに対し、日本語会話では中途発話文の後に打たれることが多いことが明らかになった。

(3) 話題の展開スタイル

日本語と英語とでは、会話参加者が協力して話題を展開させるスタイルに大きな相違がみられた。日本語では、一方が話し、他方はあいづちや共感の表明をすることで話題展開をはかる「モノログスタイル」が多用されるのに対し、英語では参加者相互に情報要求や情報提供を行う「インタラクティブスタイル」が多用されることが明らかになった。

(4) 自己開示

英語会話では、話し手は自分の個人情報・体験・感情などを story として語り、自己開示が大きい傾向がある。聞き手は質問をしたり、コメントをしたりして話し手の自己開示を促す。また聞き手自身が、話し手が語った story への共感を表すために、自分の経験などを story として語り自己開示する。英語会話においては、話し手と聞き手が共同で storytelling を行い、その結果、自己開示が大きくなる傾向がある。一方、日本語会話では話し手が自分の情報や体験を語ることは少なく、聞き手が話し手の自己開示を促すことも少ない。その結果話し手の自己開示の度合いは英語会話に比べて小さい。また聞き手自身が話し手への共感を示すために行うのは、もっぱらあいづちなどで、聞き手自らが体験を語るなどの自己開示を行うことは少ない。

(5) 質問と答え方

形態的質問文は日本語母語話者の方が多用していた。質問文の機能に次のような日英の差が見られた。英語話者は「真偽」を答えさせたり、情報補充を求めるのに対し、日本語話者は同意を求めるものが多い。日本人が英語を話す際には、真偽の判断、情報補充の質問を行い、また質問を受けた時にも、求められたものを充足する回答量と形式を用いる必要がある。

(6) 他者修復

母語会話では、英語・日本語母語話者のどち

らも他者修復をあまりしないが、両者を比較すると日本語話者の方が英語話者よりも多く他者修復をする。英語の異文化会話においても、日本語母語話者は英語母語話者よりも他者修復を多用するが、母語である日本語の他者修復では疑問文を使用しているのに対し、英語の異文化会話では相手の発言の一部の繰り返しによる確認が多いことがわかった。

(まとめ)

以上の分析結果から、英・米・豪の英語変種の語用には大きな差がなく、母語話者に共通する語用指標を明示できることがわかった。この結果と日本語母語話者の会話とを比較することにより、ターンの取り方、話題の展開スタイル、あいづち、自己開示、質問と答え、他者修復に相違があることがわかった。日本人が英語会話において、必要な時にターンを取り、発言をするためには、日英語の会話スタイルの違いを知り、状況に応じて日本語の会話スタイルとは異なる相手とより積極的に関わる英語の会話スタイルを使うことができるようになることが必要であるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 15 件)

- ① 大塚容子、初対面の 3 人会話における文体シフトの効果—「ディスコース・ポライトネス」の観点から、岐阜聖徳学園大学紀要、査読無、52、2013、17-27
- ② 大谷麻美、英語授業における異文化理解教育：教育枠組みの導入に関する一考察、京都女子大学人文論叢、査読無、60、2012、1-16
- ③ 重光由加、Question-Answer Sequence in English Conversation and Japanese Conversation：Suggestion for English Teaching、東京工芸大学紀要、査読無、35(2)、2012、1-15
- ④ 重光由加・植野義明・松本里香、大学における教養教育を考える(その6)「現代社会と人 A・B」の授業実践の検討を通して、東京工芸大学紀要、査読無、35(2)、2012、41-51
- ⑤ 大塚容子、初対面 3 人会話における共話的会話展開—あいづちを手がかりにして—、岐阜聖徳学園大学紀要、査読無、51、2012、15-24
- ⑥ 重光由加、Implications of Cultural Constraints on Ordinary Conversation for English Education through Interviews with Native English Speakers、東京工芸大学工学部紀要人文・社会編、査読無、34-2、2011、24-31

- ⑦ 木村瑞生、重光由加、松本里香、小沢一仁、滝沢利直、大学における教養教育を考える(その4) —「現代社会と人 A・B」の授業実践の検討を通して、東京工芸大学工学部紀要人文・社会編、査読無、34-2、2011、41-51.
- ⑧ 津田早苗、英・米・豪の英語の初対面会話における「聞き直し」の語用特徴、東海学園大学紀要 人文科学研究編、査読無、17、2011、125-138
- ⑨ 村田泰美、英語圏変種(英、米、豪)の男性初対面会話に現れたスタイル的特徴—ターンと発話量の比較—名城大学人間学部紀要『人間学研究』、査読無、9、2011、15-27
- ⑩ Yuko Iwata, Pragmatic Failure in Topic Choice, Topic Development, and Self Disclosure by Japanese EFL Speakers, Intercultural Communication Studies、査読有、XIX: 2、2010、145-158
- ⑪ 岩田祐子、「英語会話と日本語会話における協同構築」、文明、査読有、15 号、2010、23-33
- ⑫ Yuka Shigemitsu、Speakership Holding and its Termination Cues in Japanese Conversation, Intercultural Communication Studies、査読有、XIX: 2、2010、159-172
- ⑬ Yuka Shigemitsu、Speakership initiation cues and termination cues in Japanese and English conversation. Academic Report Tokyo Polytechnic University、査読有、33(2)、2010、7-14
- ⑭ Sanae Tsuda, Interpersonal Functions of the Polite Forms *Desu/Masu* in Japanese Conversations, Intercultural Communication Studies、査読有、XIX:3、2010、81-88
- ⑮ Yasumi Murata, Distribution of Talk in First Encounter Conversations: A contrastive Study of Japanese and English, JACET 中部支部紀要、査読有、第 8 号、2010、67-78

[学会発表] (計 19 件)

- ① 津田早苗・岩田祐子・重光由加・大塚容子、「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成」、待遇表現研究会科学研究成果発表会、2013 年 3 月 2 日、東京工芸大学
- ② 村田泰美・岩田祐子・重光由加・大谷麻美、「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成」、待遇表現研究会科学研究成果発表会、2013 年 2 月 24 日、京都女

- 子大学
- ③ 津田早苗・村田泰美・大塚容子・大谷麻美、「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用—英語会話ができる日本人の育成」、JACET 中部支部定例研究会、2013年2月23日、中京大学
- ④ 津田早苗・村田泰美・大塚容子・重光由加・大谷麻美、シンポジウム『共通語』としての英語コミュニケーションに求められるもの：コミュニケーションを教えるにあたって英語教師が理解しておくべきこと、第51回大学英語教育学会国際大会、2012年9月1日、愛知県立大学
- ⑤ 重光由加、Question-Answer Sequences in English Conversation and Japanese Conversation: From a Perspective of Intercultural Communication Skills、The 19th Sociolinguistics Symposium 2012年8月23日、Free University、Berlin、Germany
- ⑥ 津田早苗、Pragmatic Differences of Clarification Request in English and Japanese、The 19th Sociolinguistics Symposium、2012年8月23日、Free University、Berlin、Germany
- ⑦ 村田泰美、Turn-taking and Talk Distribution in First-Encounter Conversations for Males in UK, US and Australian English Varieties: Quantitative and Qualitative Analyses、The 19th Sociolinguistics Symposium、2012年8月22日、Free University、Berlin、Germany
- ⑧ 重光由加、Question-Answer Sequence in English Conversation and Japanese Conversation: Suggestion for Intercultural Communication Skills、The International Association for Intercultural Communication Studies、2012年6月10日、元智大学、台湾
- ⑨ 岩田祐子、「話し手と聞き手の協同構築としての自己開示—英語と日本語の初対面会話の分析」、異文化コミュニケーション学会第26回年次大会、2011年10月、兵庫県立大学
- ⑩ 村田泰美・重光由加・大谷麻美、Conversational Management of Inner-Circle Englishes and the implication for EFL Education (I: Structure)、大学英語教育学会第50回国際大会、2011年8月31日、西南学院大学
- ⑪ 津田早苗・岩田祐子・大塚容子、Conversational Management of Inner-Circle Englishes and the implication for EFL Education (II: Content)、大学英語教育学会第50回国際大会、2011年8月31日、西南学院大学
- ⑫ 岩田祐子、"Conversation as a joint activity: Self-disclosure and topic elaboration in English and Japanese", 12th International Pragmatics Conference、2011年7月、University of Manchester, U.K.
- ⑬ 大塚容子、*Aizuchi* in the Conversation among Three Persons — Perspective from Rapport Building —、The 12th International Pragmatics Conference、2011年7月、University of Manchester, U.K.
- ⑭ 重光由加、Different paths to co-constructing topic development in Japanese and English: Function of Questions in conversation、The 12th International Pragmatics Conference、2011年7月、University of Manchester、U.K.
- ⑮ 村田泰美・岩田祐子・重光由加 Teaching Intercultural Communication Skills: To keep a conversation interactive、The 9th Asia TEFL、2011年7月、ソウル教育文化会館
- ⑯ 大谷麻美、語用論・社会言語学の観点から見た英語教育の問題点、大学英語教育学会関西支部 学習英文法研究会(招待)、2011年1月15日、関西学院大学
- ⑰ 大谷麻美、語用論・社会言語学の観点から見た英語教育の問題点、平成22年度科学研究費補助金研究基盤研究(B)研究課題「外国語コミュニケーション能力育成のための日本型CEFRの開発と妥当性の検証」(課題番号22320108)(代表:川成美香(明海大学))講演(招待)、2010年11月19日、京都女子大学
- ⑱ 村田泰美・津田早苗・岩田祐子・大塚容子・大谷麻美、Discursive Phenomena in English and Japanese: The 18th Sociolinguistic Symposium、2010年9月2日、University of Southampton, U.K.
- ⑲ 岩田祐子・重光由加、Discursive Phenomena in English and Japanese: 大学英語教育学会関東支部大会、2010年6月27日、東洋学園大学
- [図書] (計5件)
- ① 岩田祐子・重光由加・村田泰美、ひつじ書房、『概説 社会言語学』、2013年、328ページ
- ② G. レイコフ、R. E. ヌーニェス著植野義明・重光由加訳、『数学の認知科学』、2012年、640ページ
- ③ 大谷麻美・岩田祐子・村田泰美・重光由加、マクミラン ランゲージ ハウス、『英語・素朴な疑問100』 2011年、199

ページ

- ④ ヘレン・フィッツジェラルド著村田泰美
監訳・重光由加・大谷麻美・大塚容子 ひ
つじ書房、『文化と会話スタイル：多文化
社会・オーストラリアに見る異文化コミ
ュニケーション』2010年、346ページ
- ⑤ 大谷麻美・津田早苗・村田泰美、大修館
書店、第3章2,5.2節（大谷）第5章1,
4節（津田）2,5節（村田）執筆，塩澤
正・吉川寛・石川有香編集『英語教育体
系第3巻 英語教育と文化：異文化コミ
ュニケーション能力の養成』2010年、58
-63、69、96-105、110-120

〔その他〕

ホームページ等

Politeness Research Group 活動記録

<http://happy.ap.teacup.com/zunda/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津田 早苗 (TSUDA SANAE)

東海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：80082361

(2) 研究分担者

村田 泰美 (MURATA YASUMI)

名城大学・人間学部・教授

研究者番号：70206340

岩田 祐子 (IWATA YUKO)

東海大学・外国語教育センター・教授

研究者番号：50147154

大塚 容子 (OTSUKA YOKO)

岐阜聖徳学園大学・外国語学部・教授

研究者番号：10257545

重光 由加 (SHIGEMITSU YUKA)

東京工芸大学・工学部・教授

研究者番号：80178780

大谷 麻美 (OTANI MAMI)

京都女子大学・文学部・准教授

研究者番号：60435930